

# 食と農の課題について細で考える

## – 明治大学 –

## 目的

千代田区の皆さんに親子で黒川農場に来ていただき、農作業体験（植え付けや収穫、加工）と里山散策を行い、農業に親しみ、食料生産と環境保全や物質循環について 家庭の中で話題にしてもらうきっかけをつくる。

## 研究内容・結果

場所 明治大学黒川農場および近隣の圃場、里山

- (5/26) 第1回 AM 里山散策 PM サツマイモ定植
- (6/23) 第2回 AM ハウスでミニトマト収穫 PM ジャガイモ収穫
- (7/28) 第3回 AM・PM 養液栽培, ICT 栽培キットの説明と作成
- (9/22) 第4回 AM ハウス内作業（大人片づけ、子供たねまき） PM イチゴ苗植え付け体験
- (10/27) 第5回 AM 里山散策 PM 野菜の種まき、黒川農場内で収穫体験
- (11/24) 第6回 AM サツマイモ掘り PM スマート農業体験
- (12/9) 第7回 AM ジャムづくり PM 討論・振り返り

	(5/26) 第1回 AM里山 散策	(5/26) 第1回 PM	(6/23) 第2回 AMハウ スでミニ トマト	(6/23) PMジヤ ガイモ収 穫	(7/28) 第3回 AM・養 液栽培	(7/28) PM ICT栽 培キットの 説明と作 成	(9/22) 第4回 AMハウ ス内作業 （大人片 づけ、子 供たねま き）	(9/22) PMイチ ゴ苗植え 付け体験	(10/27) 第5回 AM里山 散策	(10/27) PM野菜 の種ま き、黒川 農場内で 収穫体験	(11/24) 第6回 AMサツ マイモ掘 り	(11/24) PMス マート農 業体験	(12/9) 第7回 AMジャ ムづくり	(12/9) PM討 論・振 り返り	評価平均
3年生	5	5	5	5	3	3	5	5	3	3	5	5	5	5	4.4
3年生	5		5	5	3	3	3	5	5	5	3	5	5	5	4.4
3年生	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4.9
3年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	3	3	5	5	5	3	3	5	5	5	4.4
4年生			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5											5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3	4.9
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5.0
4年生	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3	4.0
6年生	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	4.9
中学1年生	5	5	5	5											4.9
	5.00	5.00	5.00	5.00	4.36	4.29	4.69	4.93	4.64	4.60	4.83	4.93	4.87	4.69	4.8

参加者 22 組（親子）のうち 17 組から回答をいただいた（回答率 77%）。5 段階評価（5：満足、4：やや満足、3：普通、2：やや不満、1：不満、空欄：参加していない）で回答していただいた結果、すべての平均は 4.8 となった。全体的には高い評価となった。とくに評価の低かったとりくみは ICT 養液栽培キットの制作であった。おもな参加者が小学校の 3, 4 年生であり、特に 3 年生の評価が低く、当初から想定されたことではあるが、難易度が高かったと思われる。個別の記載では、ICT 養液栽培キットの取り組みを評価する声もあり、方法を工夫すれば理解度が高まると思われる。野菜の水耕栽培は配布したミズナがかれてしまうという事態が多数発生し、急遽苗を配りなおした、しかし、それでも何割かは枯れてしまった。ICT 養液栽培キットの配布と同時に LINE を使った双方向のやりとりを開始しており、かかわった学生たちが直接回答する場合もあり、作物の状態把握のみならず、相互の関係性の構築にも効果があったと思われた。

## 考察・まとめ

農業に対する関心にとどまらず、参加者に多くの体験や経験をする機会を提供することにより、新しい視点や考え方で社会と向き合うきっかけとなるようにとの思いを込めた。

日本の農業や食料生産を維持発展させるためには、地道ではあるが、今回のように、親子を対象として、様々な切り口で農業や食料生産と関わる機会を提供する取り組みは極めて有効であると結論され、このような機会を少しずつでも多く開催してゆきたいと考えている。

